
神を滅ぼす終焉の剣

七つ夜&夜つ七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神を滅ぼす終焉の剣

【Nコード】

N5759V

【作者名】

七つ夜&夜つ七

【あらすじ】

とりあえず私が最強だと分かれば他の事は気になくていい
……ああ、そう言い忘れていた。シヨタとロリ、男の娘は全て私のだ。忘れるな

説明

世界観

基本的には今より少し技術が進んだ世界

日本は科学技術が発達し、色々と不思議な機能を持った機械などが他国から人気を集めている。ただし、基本的に役にたたない機能が多い、また、科学技術以外では漫画やアニメ等が人気ではある。表向きには魔術、魔法は存在しないとされているが、実際は世界の6割の人間が魔術師である

用語説明（言葉）

【魔術】

この世の理を逆手にとり、本来ではあり得ない現象を起こす技術。使用するには色々な下準備が必要な物が多い。ただし例外として魔術の上位に位置する【魔法】と【魔法名】が意味する魔術はいつでも発動可能である

例：発火（必要な物は火に関わる何か。それを元に火を起こしたと世界に誤認させる必要がある）

【魔法】

魔術が世界の理を逆手にとる技術なら、魔法は世界の理をねじ曲げ、自らの妄想を押し付ける技術であり、本来は人ではなく、神や幻想種と呼ばれる生物が使用する能力を再現した技術でもある
使える者は世界に数える程しか存在しない

【魔法名】

魔術師が自ら付ける魔法名。主に魔法を強化する為に付けられる。魔法名を交換するのは信頼の証であり、裏切られたら必ず殺すという意味も持つ

【魔術結社】

同じ系統の魔法を使う者が集まり、技術を高め合う事を目標にしたサークルのようなものである。中には傭兵や騎士団のような所もあり、周りの結社に戦争に近いケンカを吹っ掛けるような所もある。現在、片那達は全ての結社と敵対している

【神】

世界の外に存在する者。世界に干渉し、人や自然に何らかの影響を及ぼす。神話に存在しない者や神話とは異なる在り方の者もいる。自らの力を借りている者に【神託】という命令を出す事がある。稀にだが、たまに世界に遊びにくる者もいる

【神託】

神が魔術師に夢の中で頼み事という名の命令を出す事

用語説明（道具）

【媒体武器】

魔術師が絶対に持っている物。魔術を使う為の鍵となる物で、何らかの魔術が封じられている。先に説明された【魔法】や【魔法名】とは異なる形で瞬時発動可能な魔術
ただし、武器本来の使い方以外では発動させる事は不可能に近い
主にナイフや銃が媒体になる事が多い

【具現武器】

魔術を極める時、魔術としてではなく武器として極めた時に具現化する魔術の集大成の一つ
武器として使い方はもちろん、武器を振るうだけで魔術の発動を可能とする事が出来る為、媒体武器より使い勝手がいい
ただし、魔術として極めた場合に出来る圧縮や拡散が出来ないので
攻撃力という意味でなら若干下がると言える

【魔術防具】

上記と同じ

他は物語が進むのに合わせて説明します

神前片那【神より得た能力】（前書き）

本編には名前しか出ていませんが説明を載せました

神前片那【神より得た能力】

【勝利】

能力名：鴉の羽

神格：ウルスラグナ（ゾロアスター教より）

詳細：使用すると、辺りに鴉の羽が降り注ぐ

降り注いでいる間は魔術の使用不可と使用前に使われていた魔術、呪いの解除

背中から翼を生やし、空中戦も可能にする

【契約】

能力名：奴隷の烙印

神格：ミスラ（ゾロアスター教より）

奴隷契約を結ばせる能力

烙印を押された者は片那に絶対服従する事になる
相手の了承を得ずに無理矢理奴隷にする事も可能

【雷霆】

能力名：雷の槍

神格：ゼウス（ギリシャ神話より）

詳細：槍状の雷を神速で投げる能力

シンプル故に威力が高く、紙一重で避けると余波によって全身が爆ぜる

並の者なら見ただけで戦意を喪失するため抑止力としても使用できる

【月】

能力名：Moon Strike

神格：特になし（月を神聖化した土地の霊力を略奪した）

詳細：精神的なりミッターを外すことが出来る能力

感情に支配されるが、闘志が高くなるに連れあらゆる能力値が大幅に上がる

上昇率は月の満ち欠けに比例する（満月時が最大、新月は使用不可能）

また、相手に使用する事で、冷静な判断を出来ないようにする事も出来る

【太陽】

能力名：炎馬

神格：ヘリオス（ギリシャ神話より）

詳細：火炎を纏った馬を召喚する

最大時速4万？（一時間で地球一周可能）だが、騎乗者に自動的にシールドを張るので安全に騎乗可能

攻撃形態は全身が太陽のごとく輝く。その時の体温は15,000

【英雄】

能力名：悪の敵対者

神格：ヤザタ（ゾロアスター教より）

詳細：6柱（アシャ、アールマティ、クシャスラ、ハルワタート、アムルタート、スラオシャ）のヤザタと同じ力を得る

アシャ …… 火によるダメージを防ぎ、悪との戦闘時に戦闘力を底上げる

アールマティ …… 大地に黄金の矢を降り注がせ、その後鞭で大地を叩く事でどのような大地でも豊かな土に出来る

クシャスラ …… 彗星と溶岩により、敵を滅ぼす。ただし、善人には何の影響も与えない

ハルワタート …… 水によるダメージを防ぎ、即死でなければ健康状態まで回復させる

アムルハート……植物によるダメージを防ぎ、植物があれば食物に変化させれる

スラオシャ ……周囲のあらゆる音（声も含む）を聞き分ける事が出来る。彷徨う死者の魂を浄化させる出来る

【現在】

能力名：現在への干涉

神格：ノエル・ヴェルザンディ（北欧神話）

詳細：現在起こっている事象に干涉する事が出来る

現在起こっている事なので過去や未来に干涉は出来ない

【過去】

能力名：過去への報復

神格：ノエル・ウルド（上記と同じ）

詳細：過去に干涉し、現実を捻じ曲げる事が出来る

ただし、干涉出来るのは自分が自分が触れている物に限定される

【未来】

能力名：未来での勝利

神格：ノエル・スクルド（上記と同じ）

詳細：未来を自分有利に確定する能力

ただし、現在の状況が変わる訳ではないのである程度自身で解決しなければならない

私は忘れられた神。貴女は私だけの……ええと、巫女？（前書き）

はい、まさかの第3作目……ほかの作品放置とかしませんよ？
楽しんでもらえたら最高です

私は忘れられた神。貴女は私だけの……ええと、巫女？

ここは日本のある場所にある隠された神社。探して見つけれられる物ではなく、偶然で侵入できるような物でもない。なのに何故だろうか？ 確かにいるのだ。幼い者が……

「……あれ？ おじいちゃん？ ……ここ何処かな？」

何か呟いているようだが、今の私では聞き取れない。どうやら人を探しているようだが……この場にいるのは私を除いたらこの幼女のみだ

この幼女はどうやってここに入ってきたのだろうか？ 少なくとも、同族や魔術師には見えない。かと言って武神の領域にいる強者にも見えない。本当に、ただ偶然で入ってきたというのか？ この神隠しの結界が張られた神社の中に？ なんの魔術も、権能も使わず？

「あの、誰かいませんか？ おじいちゃん知りませんか？」

やはり、偶然で入って来たようだ。珍しい。いや、私の記憶が正しければ初めての事だ。む、泣きそうだな。そんなに出たいのかふむ、この場から出すのは簡単だが、この幼女は私の言葉を理解できるだろうか？ あれは意味を理解出来なければ効果が無いからな。……仕方ない。折鶴を送り、誘導するでしょう

「……？ 今、声が聞こえた？ おじいちゃんかな？」

む？ この場に声を発している者は誰もいないのだが？ 幻聴でも聞こえたのか？ それともまさか

「また聞こえた。こつちから……？」

まさか、私の声が聞こえるのか？ いや、しかしそれはありえない筈だ。だが、……この幼女、確かにここに向かっている

「……ここ。声が聞こえる」

何故この者は私の声が聞こえた？ 誰にも認識される事もなく、ただ存在するだけの私の声を聞くなど、誰にもできない筈だ。まさか、まさかとは思うが……この子が、そうなのか？

「誰かいますか？ ……女の子？ か、かわいい／＼／」

「貴方が……私の巫女なのか？」

「ねこ？」

「……貴女は巫女か？」

「私、ねこじゃないよ？」

……言葉が難し過ぎたか？ 子供に理解できる言葉と言えば……

「……私の友達か？」

「友達なら抱き着いていい？」

「……いや、別にかまわないが？」

「なら友達」

……この子は、いったいどういう子なんだ？ そういえば、私を見た瞬間可愛いと言って頬を染めていたな

「私は、神前片那。好きのはかわいい女の子と、男の子。特に、小さい子がいい」

「か、変わった趣味だな？ わ、私の名はリセット。……本来は違う名があるのだが、そちらは無くしてしまっただけ」

片那と名乗った子はこちらをジッと見つめた後、柔らかい笑顔でとてもない事を言ってきた

「あのね、私妹欲しかったの」

「そ、そうか」

「だから貴女は妹にする」

「は？」

コレが……私が神前片那と出会った

家族もこの子も普通じゃない

さて、片那が私を家に強制連行してから僅か1時間……その短い時間で、本当に（戸籍上）妹にされてしまった。確か面倒な手続きとかがいる筈なんだが？

「母さん、お金持ちだから」

「それで済ませてはいけないと思うのだが？」

「大丈夫、母さんの本にお金は人の心も買えるって書いてあった」

「小学生がそんな余計な知識を持つてはいかんだろう」

「そうだ。母さんが読んでる本は読むなって言ってるだろう」

「黙れゲロ兄さん。トイレに流される」

「はは、これも全て母さんの本のせいだ」

今部屋の隅で膝を抱えて泣いているのは片那の兄上の……わからん
まあ、紹介らしい紹介をされてないからな

「……おお、マイシスター。たまにはお兄ちゃんに優しくしてくれ」

「キモい奴嫌い。だから兄さん嫌い。母さんの本に妹に恋する奴は
犯罪者って書いてあった」

「俺キモくないよ？ 禁断の兄弟愛とか望んでないよ？ ただ、俺
のマイスウィートエンジェルに抱き着いて癒されたいだけだよ？」

「いや、5歳年下の妹に鼻息を荒くして近づく時点でかなり危ない
奴だぞ」

「新入りは黙らっしゃい！ 今日、今日は、今日は爺と親父がいなくて、
片那を母さんと独り占め「母と一緒にの時点で独り占めではないから
な」……二人占めできると思ったのに……畜生。俺はお前を妹と認

めてないからな」

「分かった。私もお前を兄とは認めない名称不明」

「名称不明じゃねえよ俺?! さつき片那が魅惑のエンジェルヴォイスで紹介してくれたのに忘れたというか?!」

確かに家族構成は教えてもらったが……お前紹介されたか?

『兄さん。この子がリセット。私の妹。可愛いから大好き。リセット。これは兄さん。知らないから捨てたい。あと確か名前は……あれ、なんだっけ? まあそれくらい知らないの』

……思い出したが一つも名前出てないぞ?

「つて、俺よく考えたら紹介されてなくね?!」

「今気付いたのか?」

「妹の言葉の録音と編集で忙しかったんだよ! 『大好き』と『お兄ちゃん』を繋げて明日から目覚ましにするんだ!」

「兄さん……なんで生きてるの?」

「流石にフォロー出来んな」

「チクショー!」

そのまま部屋を飛び出し、勢い余って壁にぶつかった後、全力で外に飛び出していった

結局名前はなんなんだろうか?

「おい、片那とその自称神様。今刺乗斬^{しのぎ}が外に走ってったが、何かやりやがったのか?」

「母さん、兄さんキモい。生ごみの日に出していい?」

「好きにしろ。どうせ死なねえだろうしな」

このくわえ煙草をしている男前な女性は片那の母上らしい
名は冷夜ひやといい、もとは全国制覇したレディースの初代総長でど
うたら……と片那が言っていた。足運び、呼吸、身のこなし……ど
れをとつても歴戦の猛者だ。この人が実はなんらかの武術で名をあ
げていると言われても納得してしまうだろう

「なあ、自称神様。アンタの戸籍は『買つといた』が、名前は俺が
決めといたが良いよな？ ダメと言っても決まってるんだがな」
「……それを聞く意味は無いですよ。拒否権無いですし、なにより
もう登録されてますし」

「そうか。なら今日からお前は神前神社ムツゴロウだ」

一瞬で空気が凍りついた……これからそんな名前に変わるのには耐
えられない

「安心しろ。ただの冗談だ。まあ最初は本気だったかな」

「よ、よかった。本当によかった」

「お前の名前は刃魔はまだ。いい名前だろう」

アレを聞いた後ならどれでもいい名前に聞こえる

「破魔とはもともと仏語でな。悪魔を打ち払うという意味がある。
自称神様なら悪魔くらい打ちえなきや失格だよな」

「あの、書類には『刃魔』って書いてあるんですか？」

「ああ、単にそのままだとつまらんから一文字変えたただけだ」

いい名前かは分からないが、意味は気にいった
魔を打ち払う。まさに私と巫女を表している。うん、多分良い名

なのだろう

|| || || ||

「という訳で、家族が増えた。いい、おじいちゃん？」

「僕は別に構わないよ。刃魔、これからよろしくね」

「あ、はい。よろしく願います」

この方は片那の祖父で、名は水流切だそうだが

どこか不思議な雰囲気漂わせている、謎めいた老紳士だ。見た目は今までで一番まともそうだが、まだ安心できない。いや、人を疑ってはいけ……

「おじいちゃん、手に持ってるのなに？」

「ああ、酒屋の美代さんがおすそ分けしてくれた漬物だよ」

「またもらってきたの？ おじいちゃん、毎日違う人から食べ物もらってるね」

「親切な方々が多いんだね」

「うん、良い人沢山」

「単に爺さんの気を引きたいだけだったの。あの、ボケ二人組はいつになったら気付くんだ？」

……違う意味でまともじゃなかった。この家族はいったいどういう家族なのだろうか？

「なあ、自称神様。あの人が帰ってくる前に言っておく、母さんも

「う後3分」なに?! クツ……とにかく片那の言う事聞いてけ」

「……あのね、もうちょっとで父さん帰ってくるの」

「そうなのか」

「うん。でね、何があっても驚いちゃダメなの」

「それはどうい「ただいま」

そこには……普通の方がいた

身長が180?程ある以外これといった特徴がない方だ。強いて言うなら黒縁眼鏡をしていることぐらいだ。彼のどこに驚くんだろうか?

「片那、彼に驚くところがあ「おかえりなさい貴方」……は?」

後ろから聞こえた甘い、いやこれはもはやそんなレベルではない。

聞いただけで胸やけしそうな程だ

そこには、さっきまで唾えていたタバコと男前な雰囲気が消え、服の上にエプロンを装備した冷夜殿がいた……ただし、その表情はまるで恋する乙女だ

「ああ、ただいま」

「今日もお疲れ様です。ごはんもお風呂も用意してありますからね

」

「そうか。ありがとう」

「い、いえいえ／＼ 銃兵衛さんのためなら何でもやりますよ」

」

これは先程の方と同一人物なんだろうか?

「母さん、父さんの前だといつもあんな感じ」

「……結婚何年目だ?」

「13年目」

「……13年間コレなのか？」

ある意味夫婦の鏡……なのだろうか？

Ⅱ Ⅱ Ⅱ

「……うん、僕は構わないよ。ただ……養子にするよりはまずは警察に電話するのが普通じゃないか？」

「じゅ、銃兵衛さんを驚かせようとして……ダメでしたか？」

かなり悲しそうに告白する冷夜殿、……本当に同一人物か？ いや、まさか二重人格か？

「怒りませんよ。もう済んだことですし。ただ、出来れば相談して欲しかったです。僕も家族ですから」

「ご、ごめんなさい。お仕事中に電話したら迷惑かと思ひまして……」

「何を言っているんですか。貴女からの電話ならいつでも大丈夫ですよ。会社でも許可はもらってあります」

「会社でも？！」

何故許可が下りる？！ いや、そもそも仕事に差し支えはないのか？！

私が混乱していると水流切殿が答えてくださった

「あの会社は細かい事は気にしない、いや、むしろ楽しめるのなら社員全員で楽しむようなところがあるからね」

「それが会社として成り立っているんですか?!」

「以外かもしれないけど世界で一番売り上げを上げている会社だよ」
「ち、ちなみにどんな会社なのですか?」

「最初はただの玩具屋だったんだけど……大きくなるにつれて、機械や薬品、警備に重火器等々……色々な分野に手を出し、全ての場所ですべてのトップを出し続けてるよ」

な、なんとという節操の無さ……

いや、だが全ての分野でトップとは凄い事だ。よほど優秀な人材が集まっているのだろう……それはそうと、こ、この二人はいつまでこの空気を出し続けるんだ?!

「銃兵衛さん」

「愛してます冷夜さん」

「二人とも、刃魔はまだ耐性がないんだ。そろそろ止めなさい」

「「なら続きは部屋で」」

この家族は色々な意味で大丈夫なのか?

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓

その後

「そついえば刺乗斬は?」

「出てった。せいせいする」

「多分また迷ったな。しょうがない、迎えに行くか」

「おじいちゃんが行くなら私も行く」

キャラクター紹介（幼年期）

名前：神前 片那（かんざき かたな）

性別：女

年齢：6歳

誕生日：12月31日

身長：116 / 7？ 体重：19 / 8？ 座高51 / 2？

髪型：栗毛のサイドポニー

瞳：青みがかった黒

好きな色：特になし

特技：酒の銘柄に合わせて、ちょうどいい塩梅の熱燗が作れる（祖父の為に練習した）

趣味：自分より小さな者に抱き着く事

好きな物：小さい男の子と女の子、小動物、おじいちゃん

嫌いな物：兄さん、クーラー

運動神経：遊び等より

かけっこ：追いつかれたことない

プール：誰よりも上手

腕相撲：男子弱すぎ

ケンカ：負ける自分が想像できない

頭の良さ：普段は1＋1も出来ないが、勝負事の場合とてつもなく難しい問題もスラスラ答える

容姿：

中性的な顔立ちで、少年に間違えられる事もある。三百眼の気がある

肌は雪のように白い。ただし毎日走り回ってるため健康的に焼けてる

個人データ：

まるで稀代の職人がその生涯を賭けて作り上げた芸術品のような娘とてつもなく自分に正直な女の子。泣きたい時は大泣きするし、笑いたい時は大笑いする。そして、暴れたい時は大暴れする。そして祖父に注意され落ち込む

家のメンバーではおじいちゃんが一番大好き。そして兄さんがこの世で一番嫌い。毎日祖父と一緒に何かをするのが日課。そのせいか、料理や家事もある程度出来る

おじいちゃんの言う事は全て正しいと思っている節があり、「悪酔いしないように」または「社会勉強」の一言で簡単に酒を吞んでしまう。いつの間にか祖父よりザルに……

可愛い物が大好きで、いつか世界中を可愛い物で埋め尽くしたいと思っている。ちなみに好きなタイプは「弱弱しいのに勇気がある女の子みたいな男の子（シヨタではなく男の子希望）」。あまりに具体的過ぎて質問した方が驚く

リセットを一目で気に入り、妹にしようと努力中。目指すはエタールロリな妹にすること……どうでもいいが小学生の女の子が目指す目標じゃない

名前：リセット 戸籍上は刃魔（はま）

性別：女

年齢：少なくとも太陽系よりは上らしい

身長：105 / 2 ? 体重：17 ? 座高：40 / 2 ?

髪型：プラチナブロンドの髪を背中まで伸ばしていたが、片那が紐でまとめた

瞳：深紅

好きな色：黒と銀色

特技：特になし

趣味：特になし

好きな物：巫女、プリン

嫌いな物：神、魔術師

運動神経：皆無と言っても過言ではない

頭の良さ：神話や歴史は得意

容姿：

肌は白磁のように白く、頬は薄い桃色。瞳は大きく、くりっとしている

個人データ：

未成熟ゆえに美しい少女

かなり古い神格を持っており、ほぼ全ての神に崇められる……はずだったが、何故か封印された

いきなり家族にされ戸惑いを感じているが、巫女の為と健気に努力中。本人は気付いてないが、近所の子供からものすごい勢いでアプローチされている。たまに高校生などが来ては片那に殴り飛ばされる

巫女である片那を大切に思っている反面、急に抱き着いたり、キスされそうになるのは止めて欲しい。特に風呂場での「スキンシップ」は本当に止めて欲しい

本人は自覚していないが、実はかなりの寂しがり屋な性格。片那と一緒に寝るのが大好き。ただし、寝ている間に「スキンシップ」されていることに気付いていない

神様なのにお化けや妖怪などが怖い（ただし悪魔は別）

名前：神前 刺乗斬（かんざき しのぎ）

性別：男

年齢：11歳

誕生日：9月10日

身長：168？ 体重：46？ 座高：78？

髪型：黒髪のスポーツ刈り

瞳：黒

好きな色：赤

特技：投げっぱなしジャーマン、踵落とし

趣味：妹に抱き着く事（しかし成功した事はない）、妹の為に何かをすること

好きな物：片那、片那の願い、片那と過ごす時間

嫌いな物：片那に何かする奴、刃魔、母の本

運動神経：学校生活より

ケンカ：負けなし

水泳：カナヅチ

体育：水泳以外はトップ

頭の良さ：全教科合わせ平均95以上を常にキープ

容姿：

やや目つきが悪いが全体的に整った顔立ち。すらりとした体系だが筋肉質

個人データ：

妹に異常な程の愛情を注ぐ真正のシスコン。妹からの呼び名はゲロ兄さん、ゴミ兄さん、誰だっけ？ 等々……

根はまっすぐで面倒見がいい。そして、気配りもうまいので学校では人気者。

一度友人になったらどんな事があっても信じ続ける漢。例え、何があっても友人を裏切らないため、自然と友人が増える

いじめを見過ごせない性格で、困っているならたとえ自分が大変な目にあっても助ける。そのせいで自分がいじめられても笑顔で気

にするなどと言える

本人は気付いていないが女子にもモテている。が、シスコンであるため気付かない&相手も告白しづらい

運動神経は良いが、昔海でおぼれたため、風呂以外で水に浸かると脅え、泳ぐことが出来ない

念の為言うが、片那への愛はLikeでありLoveではない

名前：神前 冷夜（かんざき さや）

性別：女

年齢：29歳

誕生日：7月10日

身長：174? 体重：61? 座高：81?

B89（C64）/W54/H88

髪型：栗毛のポニーテール

瞳：黒

好きな色：白と青

特技：拳で強化ガラスを粉々に出来る

趣味：銃兵衛さんとデート、弁当作り

好きな物：銃兵衛さん、子供、木刀、喧嘩

嫌いな物：銃兵衛さんに危害を加える者、安眠妨害

運動神経：結婚するまでの武勇伝

喧嘩：全国制覇

ストリートファイト：15（男、なんらかの武術経験有）対1で

無傷で勝利

頭の良さ：難しい漢字は得意

容姿：

中性的でどこかワイルドな色気がある。シャープな顎、気の強そうな目

好きな人の前だと蕩けた様な瞳に変わる

個人データ：

全国制覇までした元スケバン。舎弟が500人以上いる。そして、今でもパシリとして使っている

本人に自覚は無いが銃兵衛の前だと別人か？！と思う程に性格が変わる

16歳で結婚した。ヤンキーとかは結婚が早いのです。そして18歳で刺乗斬を出産

お酒と煙草が大好き。でも、銃兵衛の前だと全く吸わないし吞まない。愛は偉大である

子供に対してそっけない態度が多いが実際はただどんな風に接すればいいのかわからないだけである。なのでとりあえず、チームの後輩と同じ扱い方をしている

名前：神前 銃兵衛（かんざき じゅうべえ）

性別：男

年齢：32歳

誕生日：12月25日

身長：187？ 体重：75？ 座高：92？

髪型：黒髪の刈り上げ

瞳：青みがかった黒

好きな色：冷夜さんが好きならなんでも

特技：情報収集

趣味：冷夜と話す事

好きな物：家族、冷夜

嫌いな物：接客、社長

運動神経：家族などの証言

片那：走ってる車を殴って壊した

刺乗斬：ひったくりしたバイク（約60?くらい）を走って追いついて、片手で持ち上げた

冷夜：初めて会った日、半日戦いましたが、一度も攻撃せず、全て紙一重に避けられました。さすが銃兵衛さんです、

水流切：毎日35?先にある会社まで走って行ってるよ? ちなみに7時に出て毎回7時半には着いてるらしいよ

頭の良さ：興味のあるものなら出来ます。興味がなくてもある程度は出来ます

容姿：

何処にでもいそつなのは何処にもいなさそつな顔。唯一の個性は黒縁眼鏡

個人データ：

会社でのあだ名はTHE没個性、あんまりなあだ名である

神前家の大黒柱、会社では主に謀ほ、情報収集を任されている

ちなみに、部長。社長が信賴してる人No.4

その没個性が一部では人気。なんか見ててホツとするらしい。が、妻との電話が甘すぎてたまに独身の方が大変な事になる

見た目は細長く、とても弱い人に見えるが、……実は脱ぐと凄い人

昔、とあるところで銃器の使用方法を習い、異常な腕前。銃刀法は守ります

名前：神前 水流切（かんざき つるぎ）

性別：男

年齢：76歳

誕生日：2月14日

身長：171？ 体重：70？ 座高：84？

髪型：黒髪の刈り上げ

瞳：青みがかった黒

好きな色：白

特技：節約、言葉が分からない土地でも現地の人と仲良くなれる
趣味：ちよつと遠くまで散歩

好きな物：孫

嫌いな物：約束を破ること

運動神経：不明

頭の良さ：不明

容姿：

皺は少なく、目は優しく。彫が深い

個人データ：

垢抜けしすぎな爺様。四捨五入して80歳になるが女性にモテている。ちなみに昔は遊び人だった

今こそ家で孫の面倒を見ているが、昔は世界中を歩き回っていた
幼馴染の祖母はかなり苦労したらしい。主に女性関係で（ただし
本人は祖母に一途だったと主張）

気配りが上手く、見た目も平均以上、経済力もあり、一度した約束は破らない。片那が目指す存在でもある

唯一の欠点は、子供にどうとうと酒を吞ましたり、男と女の付き合い方等を、堂々と教える事

初めてお姉ちゃんって呼ばれた

さて、もうあれ（強制的に妹にされて）から一週間が経とうとしている

そんな私の心境は

「誰か、助けてくれ」

もう完全に追い詰められていた

朝は片那に体を弄られて目を覚まし、朝食を摂っている間はシノ（刺乗斬の事）から睨まる

昼は片那に外に引きずられ、揚句の果てにスカートを公衆の面前で思い切りめくられた。しかも、その後20歳程の男に付きまとわれ（警察を呼んで事なきを得た）、片那の『おままごと』で精神的にも肉体的にもボロボロにされた

夜はお風呂で変な風に体を洗われ、水流切さんの晩酌につき合わせられてしまい、あの二人のストロベリートーク？（最近はそういう風にいうらしい）を延々と聞かされた

そして、極め付けには……

「刃魔、今日も『お勉強』」

「い、嫌だ。あんなの拷問だ。せめて普通の勉強にしてくれ！」

「ダメ。片那がお姉ちゃんと呼ぶまで続ける。一緒に頑張ろうね♪」

「だ、誰か助け」「頑張れ」「そんな薄情な？！こ、こんな耐えられるかー！？」

片那の拷も、もといお勉強で眠ることすら許されない

誰か、代わってくれ

〃 〃 〃 〃

それから1時間後、ようやく解放された。もう7時を回っている
ちなみに捕まっていた間、半分くらい意識がどこかに行っていた
が……おそらく自己防衛の為だろう

まあ、それはともかく次は私の勉強だ
巫女としての最低限の知識を付けてもらわないとな

「片那、次は私との勉強だな？」

「おやすみ」

「待て！ さっきまで普通に起きてたのにいきなり眠ろうとするな
！」

「お勉強嫌い。……刃魔も嫌いでしょう？」

「普通の勉強なら別に問題はないぞ？ 小さい子がどれだけ素晴らしいかを語られるのが困るんだ」

「可愛いのはとても幸せ。それを愛でるのはもつと幸せ。私に幸せ、
ふりーず」

「プリーズだ。それはそうと、神話や歴史、戦闘方法等々の勉強を
する約束をしたんだ。しっかりやってもらうぞ」

「おじいちゃん、たすけて」

その言葉を聞き、水流切さんは……

「小さい頃からそういう事を勉強するなんて片那は凄いね」

「よし頑張る」

褒めてやる気を出させた

ちなみに、コレは水流切さんしか出来ない。いつも本当に感謝しています

まあ何はともあれ、一時間の神話勉強が始まったのだが……

「ミスラは古くは天測の神と呼ばれ、ある絶対神と表裏一体の存在だったが、ゾロアスター教ではその神の家来になっている（まあ立場は対等だったらしいがそれは説明しなくても良いだろう）。時代が進むにつれ、司教神、軍神、光明神、契約神等々に姿を変えられるほどに器用な奴だったな」

「その人ってどんな人なの？」

「いや、人ではなく神なんだが……そうだな。見ず知らずの誰かに助けを求められても、笑顔で助ける程お人よしだったな。まあ、癪癪を起すとイノシシになって大暴れするが。あのときは大変だったな」

ウルスラグナがいなければ絶対に『菓子を取られて大暴走事件』は収まらなかっただろうな

庭は半壊するし、宮殿は4分の1しか残らなかったし、怪我した奴らが大量出たし

ああ、思い出したら胃が……

「刃魔、なんでお腹抑えてるの？」

「いや、なんでもない。片那はちゃんと勉強しててくれ」

「お姉ちゃんって呼んでくれなきゃヤダ」

あきらかに私より（見た目ではなく実年齢が）年下の者にそんな呼び方をしたくないんだが……まあ、それでやる気を出してくれるなら言っても良いか

「じゃあ、お姉ちゃん。勉強をしっかりして欲しい」

「……／＼／＼ う、うん！ 頑張る！」

〃 〃 〃

「片那、刃魔。勉強の方はどう、……寝てるね」

「まあ、もう8時半ですし」

「ふふ、こういうところは普通の子供なんだね。性格や性癖はともかく……自分の孫の将来をこの年から心配なのは珍しいのかな？」

「そうですね。僕も5歳の頃『ロリシヨタ男の娘、私の物。手を出したら神様でも許さない。おーばー？』って、保育園の短冊に書いてあった時は泣きました」

ちなみに、刺乗斬の短冊には『妹が普通に兄さんと呼んでくれますように』と書かれていて別の意味で泣いたのは内緒だ

「そうだね。まあそれはそうと、毛布でも掛けよう」

「そうですね。……ところで、お義父さん。刃魔君の事なんですけど、あの噂は本当なんですか？」

「ああ、【赫^{あか}の断罪者】も【精霊騎士団】も躍起になって探してい

るみたいだよ。それどころか【lazy fellow】ですら動
いているみたいだ」

「つまり、この子は本当に神だと？」

「さあね。それこそまさに神のみぞ知る、だよ」

私は護る為に剣を取る（前書き）

お久しぶりです。遅くなって本当にすみません

私は護る為に剣を取る

今日は私の人生が決まった日だ

それは幸せなのか、不幸なのかは分からないけど

私は絶対に後悔はしない

〃 〃 〃

その日はいつもと少し違っていた。最悪な方向に
家にお客さんが着てたのだ。凄く嫌いな奴が

「やあ、片那ちゃん久しぶりだね」

「帰れ糞ジジイ」

そう、私の最も嫌いな男にしておじいちゃんの義理の弟、そして
お父さんの働いてる会社の社長でもある

規格外の大金持ち

龍童昂りゅうどうほうが朝っぱらから私の家に来てるのだ

この変態ジジイは毎回何らかの事件を持ってくる。そして今回も
持ってきてた

「片那、今日は大切なお話があるんだ」

「なにおじいちゃん？」

「世界の秘密について」

それも世界規模の問題とか……本当に勘弁して欲しかった

〃 〃 〃 〃

居間に行く刃魔までいた。……普段私より寝坊助なのになんて
いるんだろうか？

「さて、片那が来たので話を再開するでしょう」

「って、仕切ってるのが刃魔なの？」

「まあ今回は私が一番関係のあるからな」

刃魔に関係がある？ えっと、美少女コンテスト？

「……今お前が考えてるのは絶対違う自信がある」

「エスパー？」

「いや、勘だが。まあそれはもう気にするな。とにかく話を始めるぞ」

さっきまでの微妙な空気を完全に無視して刃魔はまじめな話を始める

それはとっても、めんどうな話

〃 〃 〃 〃

昔……本当の意味で何もなかった頃、ある存在が生まれた
色々な呼び方があるが……やはり、【原始】が一番有名だろうな。
その【原始】が生まれると同時に私が、【終焉】が生まれた。始まりがあるなら終わりも同時に存在するという事だ

つまり私はあらゆるモノの中で1番早く生まれた存在の片割れだという事だ。まあ、威厳も何も無いせいで次々と生まれる神や世界に嘗められまくったがな。兄さ、【原始】は威厳以前に恐れられていたから私と違って嘗められていなかったが

まあそれはともかく、私が嘗められていたというのが問題なんだ。一部の者の中では私を【原始】と同列に並べるのが我慢出来ず、自分の方が上のように振る舞う者がいたぐらいだ。だが、私にある権限があることを知った瞬間、全ての者が私を消そうと躍起になった。が、やはり心の中で侮っていたんだろうな。たかが、オマケで生まれた存在がこれだけの神に攻められ生き残れるはずがない、脆弱な人風情に頼ることではしか力を使えない者が我々に勝てる訳ががない、と

そして私と奴等がぶつかった結果、当時存在していた神々は8割消滅し、世界はほぼ全ての世界が死に絶えた。生き残った神々も結局私を消せずに、次元と次元の間に小さな牢獄を作り封じる事しか出来なかった。そして、生き残った神々は私を監視し、同時に私の巫女となる者が生まれる可能性を全て殺し切る事にした。だが、そこでまた一つの誤算が生まれた

【原始】が一人の人間に興味を示し、更には力を与えたのだ。そのせいで神々はそちらにも監視を付けることになった。そのせいで、いやそのおかげでというべきか、監視が緩みある才能を持った少女が生まれた。神前片那……そう、お前だ

だが、神々はつい先日お前の存在に気付いた。そして……昨日、殺すためにある事をした。そう、魔術師達に神託という形で抹殺指令を出したんだ

「……はあ？」

正直半分も分からなかった

神様？ なにそれ可愛いの？

魔術師？ S L B 撃てるの？ あ、それは魔王か

「まったく理解してないだろうな」

「うん。あと、抹殺って何？」

「……お前を殺しに来るという事だ」

「ふうん。でも、さっきの話を聞いてて思ったんだけど……刃魔はどうなるの？」

「……気付かなくてもいい事を」

それは気にするなという意味？ それとも巻き込みたくなかったという意味？

「私は……また封じられるだろうな。だが、安心しろ。封じられる前に、お前に危害を加えられないように」

「そんなのヤダ」

「え？」

そんな終わり方は嫌だ。刃魔と離れるなんて嫌だ。私だけ守られるなんて嫌だ

何より、大切な妹がまた独りになるのに、私が守れないのなんて許せない。そんなの、私が出来る生き方じゃない！

「来るなら戦えばいい。殺される前に倒せばいい。死ぬのは嫌だけど、刃魔がいなくなるのはもっと嫌だ！ そんなの私は許さない！」

そう、はつきりと言った瞬間……スバルの糞ジジイが笑い出した
流石に失礼だ。すねでも蹴ってやろうかな？

「はははっ！ 流石は兄さんの孫だ！ まさか、義兄さんが姉さん
に言ったセリフとまったく同じセリフを言うだな、ぐふっ?!」

「スバル、少し黙ってる。……片那、一つだけ聞かせて欲しい」
「なにおじいちゃん？」

「大切な人を護る為なら、どんなに辛い事にも耐えられる？」

そんなの聞く必要もない当たり前すぎる事
辛い事を耐えるんじゃない。私は

「もちろん」

大切な人を護りたいから辛いことをやり遂げるんだ！

私は護る為に剣を取る（後書き）

とりあえず幼年期は終了。次は時間がかかなり飛びます

ブローグ

あれから約6年、私は中学生になった

正直、全てを修行に費やした為、義務教育など受けていないが……
まあ問題ないだろう

やろうと思えば何でも出来るからな

「片那、やっぱ早いよ。いくらなんでも4時に来てる人はいないよ？」

「ふっ、刃魔。私がこんなに早く来た理由が分からんか？」

「これっぽっちも分らないけど」

そこで即答されるのはものすごく悲しいんだが……

「もう7年近くともに過ごしているんだ。私の考えくらい分かっても良いだろう」

「あはは、無理だから」

本当に泣きたくなった私は悪くない。ああ、悪くなんかない

「私がこんなに早く来た理由……それは！特に理由などない」

「ええー……今までの会話全否定だよ？」

「とにかく早くに見ておきたかったんだ。私が通う学校を。小学校も通っていないようなもんだからな」

「片那……」

「だから、私はここの生活を楽しむ！さあ、ともに素敵な思い出を作るぞ！」

「うん！」

待っている私立如月学園！
そして、待っているぞ、可愛いシヨタロリ達よ！
……っといか
んいかん。鼻血が

【昼】入学式に遅れました

刃魔 side

現在、理事長室には嫌な空気が流れている。殺伐とした、という表現が適切だろうか？

「ジジイ、わざわざ来てやったのに茶も出ないのか？」
「お前みたいな問題児を受け入れてやるだけでもありがたいと思え」

見ているだけで胃が痛くなるような笑顔で2人が話しているのだ
そもそも発端は私達の入学が遅れた事が原因だった

本来なら新入生として入学する予定だったのだが……直前に片那が失踪したのだ。そして2ヶ月もの間、日本全国の美味しいもの巡りをしてようやく帰って来たのだ
もちろん入学は出来るが、入学が遅れた理由が理由だけに教師の方々から良い印象を持たれていないのだ。しかも、校長室に呼ばれ長い話をされてる時に

「おいオッサン。ツラ、ずれてるぞ」

コレである

そのせいで校長は激怒、教頭はなだめるのに必死になり、騒ぎを聞き付けた生徒や教師が集まり大騒ぎ、そして私がひたすら謝り、片那は欠伸しているという地獄絵図に

で、学校側が受け入れを拒否しかけたが……まあ理事長である昴さんが色々手回ししてくれて、ようやく今日から登校出来るようになったのだ

「早く教室に案内しろ」

「分かったから……問題を起こすなよ？」

「私が問題を起こすんじゃない。社会が問題だと騒ぐだけだ」

「片那、言う通りにしよう。な？」

「うッ。は、刃魔が言うなら仕方ない。……私何も悪い事してないのに」

小さい声で何か言っているが気にしない方が良さそうだろ。なんというか、精神的に

「じゃあ今から案内人と呼ぶから待ってろよ。マリア、来てくれ」
「呼んだか御主人」

昴さんが名を呼ぶと、背後の扉から一人の女性が現れた
艶やかな黒髪をなびかせ颯爽と歩いて来る姿は映画のワンシーンのようだ

「ふむ、初めまして。私は遠野真理亜。一応先輩だ。よろしく」

「……よろしく頼む。私は神前片那だ」

「神前刃魔です。よろしく願いします遠野先輩」

挨拶が済むと、昴さんがある情報を提示した

「彼女は君達と同じだ。そこでは薬学を研究しているからケガをしたら薬を貰いに行くと良い。そしてマリア、彼女達が【神殺し】だよ」

「そうか。君達があ……改めて自己紹介しよう。魔術結社【新月の光】の薬学最高責任者、魔法名、『魔理亜』だ」

「やはり同類か。私は魔術結社【光りなき神月】神滅の巫女、魔法名は『神裂刀』かんさきかたなだ」

「同じ場所で働いてるんですね。私は【光りなき神月】の加護神が一柱、『終焉』です」

「さて、そろそろ二時間目が始まるので案内しよう。はぐれたないように気をつけてくれよ？」

本当の自己紹介が済み、ようやく教室に向かう事になった
出来れば普通の学生生活がしたいものだ

【昼】教室は別々に

刃魔 side

真理亜さんに教室まで案内していただいたが……

「片那は1ーB、刃魔は1ーDだ。2人とも、個性的なヤツが多いがまあ基本的には良いヤツばかりだ。仲良くするように」

まさか別々に分かれるとは……色々大丈夫なのか？ 何がと言わないが

「あと……片那、お前は問題を起こさないようにしろよ？」

やはり、真理亜さんにも注意を受けた。当たり前か。結社での噂を一度でも聞けばどれだけおおらかな人物でも同じ発言をするだろう

「それはやれという意味です分かります」

「真剣に考えてくれ。頼むから」

「真剣に考えてるさ。故にこの発言だ」

この時程私は後悔した事はない。何故私はもっと早く注意しなかったのかと

〃 〃 〃 〃

教室の前で教師の方と合流した。その後、待つように言われたので待っている

「今日は超重大発表があるよ。なんと、今日は新しい学友が来るよ。今、可愛い子やカッコいい男子がいいなと思った奴拳手。……うん、みんな素直でよろしい。ここでいいお知らせだ。ただし、男子にとつてな」

いきなり野太い歓声が上がった。正直、ここまで期待させるような事を言われると緊張するんだが？

「と言う訳で、その可愛い女の子のご入場だ。ほら、入って入って」

教師の方の言われるままに教室に入る。視線を感じ、少しこわ、緊張するが……ま、まあ、片那が問題を起こした時と比べればこれくらい……！

「自己紹介からお願いするよ」

「わ、私は神前刃魔です。こ、これからよろしくお願いします」

ほんの少しの静寂の後、拍手が起こった

そして、……拍手が止んだ後

「それじゃあ、親交を深める為に自習という名の質問大会でも始めるか」

人の波に飲まれ、もみくちゃにされる事になった

「身長と体重は？」「好きなタイプは？ やっぱりクール系だね」
「小さいな」「スリーサイズ教える！」「妹として扱っていい？」
「もしかして飛び級？」「今度一緒に服会に行こうよ！」

後半もう質問でも何でもない
それに答えたりツツコミを入れながら

片那もちゃんと挨拶出来ているか不安だった

〃 〃 〃

??? side

「初めまして。私が神前片那だ。これからよろしく頼む」

もし、神に寵愛ちゆうあいを受けている者がいるのなら……彼女は確実にその一人だろう

スラリと伸びた手足やメリハリの利いたスタイルはとても同い年だとは思えない。艶やかという表現が似合う栗色の髪や、瑞々しく健康的に焼けた肌は美しいだけではなく、どこかワイルドだ

「モブ教師、私は何処に座ればいい？」
「モブって……！ え、ええっと、あら？ 今日如月さんは休みみたいね？ ならそこに座ってくれる？」
「分かった」

片那さんが席を目指してすれ違う時、ほとんどの生徒が熱に浮かされたような顔で見ている。おそらく僕もそうだろう

そして、穴が開くほど見ていたのに気付かれたのだろうか？ 不意に視線が交差した

狼狽え、少し挙動不審になっているかもしれない

そんな僕が面白かったのか、それとも他に何かあったのか。彼女が小さく笑った

「……ッ！」

不意打ちだった。顔が赤くなるのを止める事が出来ない
そして、僕が抱いている感情を理解した

——僕は彼女に恋をしたのだ

〃 〃 〃 〃

片那 side

ようやく学校が終わった。だが……周りの者は私を帰してくれそう

にない

「美味しい喫茶店知ってるから一緒に行こう!」「ゲーセン行こうよ」「ホテルに」以下似たような内容が延々と……

「すまない、妹を迎えにいかねばならないんだ。また誘ってくれ」

刃魔がドアの向こうに見えたので咄嗟に言ったが、思いの外うまくいった

という訳で現在、裏通りに来ている。理由は簡単

買い物だ

「コレまとめ買いするから安くならないか?」

「一割ぐらいなら引いてやるよ」

「買った」

「売った」

「片那、それなんだ?」

「もちろん」

そこで私は誇らしげに胸をはり（この時刃魔が泣きそうな顔で胸を押さえたのは何故だろう？）答えた

「ロリやシヨタ、男の娘を『盗撮する』為の機材だ！」

つい気合いが入り過ぎて大声になったのは仕方ない

「犯罪じゃないか?!」

「バレなければ罪にはならない♪」

「……どこで、育て間違えたんだ？」

失礼な。こんなに自分に正直な人間はまずいない

さて、そろそろ本当に帰るとするか

【夜】月見と酒と黒装束（前書き）

何故にテンションが変わると書き方まで変わるんだろうか？

【夜】月見と酒と黒装束

私達はいつも一緒に訳ではない。学校では別のクラスだし、日常生活でも別々にいる事が多い

特に夜はお互いに時間が欲しいので食事の時と入浴時、就寝以外はそれぞれ好き勝手に何かをする

そして、今私はおじいちゃんが送ってくれた「蓬萊」片手に近所の公園まで散歩をしに来ている

夜の散歩は私の数少ない趣味だ。そして、気にいった場所で酒を飲むのも……私の趣味の一つだ。未成年？ 魔術師的にはまったく問題ない

「やはり、此处から見る月は綺麗だな」

ベンチに腰掛け、破鏡——半月のこと——を見詰める
魔術師になってから、私は月が好きだ。人工の光にはない柔らかさと明る過ぎない光は癒しを与えてくれる

「……はあ」

だが、月がどれだけ優しい光を発しようと……私に敵対する者達の気持ちには響かないらしい

「まったく、少しは私の都合も考えて欲しいな。出てこい猿共」
「……」

何処からともなく黒装束の集団が現れる。最低でも10人はいるだろう

だが、そんな事はどうでもいい。問題は……知り合いがいる事だ

「ふん。昼ぶりだな。1年B組出席番号6番大守堅二」
「なッ?!」

そう、今日私と目が合った瞬間に怯えていた（勘違い）相手だ。魔力が少なかったので一般人だと思っていたんだがな

「は、はは。顔を隠してるのにはれるだなんて、やっぱり凄い人な
んですね」

「当たり前だ。私は」
「あまり後輩に話し掛けないでくれるかな？」

クラスメートとの会話は、メガネを掛けた草食系男子に止められた
いや……見た目とは裏腹に凄まじく鍛えられているらしい

「オオカミ、盟主に言われたでしょう？ 敵とは親しくするな、と」

「す、すみません」

「いえ、分かれば良いんですよ。さて……私の名はドウーク。貴女のような危険人物は殺せとの命令を受けて来ました。結社名は【ブレス・オブ・ドラゴン】です」

「ほう？ 彼の有名な【竜の吐息】か。だが……何故だろうな？

武器が全員、剣や弓なんだが、どこら辺がドラゴンなんだ？」

魔術結社の名前には意味は特にない。だが、集まる者が似た伝承や武器に憧れている傾向が強いため、それに因んだ獲物を使うのが一般的だ

「ああ、そこは見解の相違ですね。我々は竜という空想を目指すのではなく、竜に関わる英雄を目指す者なので。まあ、オオカミのような変わり者もいますがね」

「……」

「つまり貴様等はアーサー王やジークフリート等をモチーフにした魔術を使う、という意味だな」

「さあ、どうでしょうね？ では、そろそろ」

「ああ、そうだな」

話は終わりだ、とても言わんばかりに剣を抜く黒装束共

それに対して片那は素手だ。どう考えても勝ち目は少ない

だが、片那はそんな事は関係ないと言っかのように笑みを作る

「来い。私も少し遊んでやろう」

|| || || ||

ドゥーク side

13 vs 1という誇りも何もあつたものではない闘いなど不毛でしかない。これが逆であれば楽しめるのだが……

そう思いながらも私は矢を放つ。理性では分かっているのだ。盟主の命には逆らえないと……だが、私の戦士としての誇りなのか、心の何処かでこの戦闘を止めたいと思っているのも確かだ
そう、私は相手の力量も分らずにそんな事を考えていたのだ

「……バカな」

まるで私の浅はかさを笑うかのように……目の前にいる化物は全ての攻撃を紙一重で避け続けている。確かに13人とはいえ、一度に攻撃出来る人数に限りはある。だが、四方からの連撃だけではなく、上から降る矢の雨（魔術により味方には当たらないようになってい）や魔術による下段攻撃すら避けきるのは神業としか言いようがない

「ハッ！」

部下の一人が、彼女に向かって剣を振り下ろす。そして、彼の剣は彼女を袈裟に切り裂いた。彼も当たるとは思っていなかったのだろう。簡単に切り裂いた事に驚いていた
今までかすり傷さえ負わせなかった相手にしては余りにも呆氣ない終わりだ

……だからだろう。皆が獲物をしまわないのは

「……魔術名アスカロン。鎧や盾等の防御手段ごとを敵を切り裂く事が出来る魔術か。ウォーターカッター使った方が速いんじゃないか？」

「ば、バカなッ?!」

何処からともなく聞こえた声に全員の肝が冷える。たった一度の使用で魔術の特性を知られてしまったのだ。魔術師にとってこれ程殺りにくい相手はいない

「そうだな。つまらない魔術だったが、見た以上お代は払わないとな」

突如、美しい音が響く。コレは……ハーモニカだろうか？ 曲は分からないが、なんて悲しい音色なのだろう。まるで何かを悲しんでいるかのように聞こえるのは私の気のせいかな？
終わりは訪れた。戦闘中だというのを思いだし、とっさに構え直す

「【亡き王女の為のパヴァーヌ】。良い曲だろう？　レクイエム 鎮魂歌に相応しいと思わないか？」

「笑えませんか。誰の為のレクイエム何ですか？」

彼女は私達の前に姿を表した。だが、誰も斬りかからない。当然だ。先程のように自分の魔術を調べられたらたまったものではない

「【魔王】または【魔奏の旅人】という名を聞いた事がないか？」

それは魔術を習う者が必ず習う災厄の名前だ

【魔王】は約5年前に現れた結社潰しの魔法使いの名だ。たったの3日で10の結社を消し去った【存在しない魔法使い】。魔法を極めた神の敵対者だ

【魔奏の旅人】は2年前に話題になった都市伝説。あらゆる魔術を操り、各地を旅する旅人だ。旅人の邪魔をした者は美しい音色を聞きながら滅殺されるという

「まさかとは思いますが、貴女が……？」

「ああ。なんなら貴様の魔術が何の意味の無いことを見せ付けてやるのか？」

「ならば……我が弓を受けてみよ」

先程までの矢と違い、10年以上魔力を溜め続けた最強の矢【マルドゥークの矢】を構える

「ああ、避けも防ぎもしない。来い」

私に向けられた言葉は、私個人ではなく、周りにも影響を与えた当然だ。私の魔術の威力を知っている者なら誰もが驚くに決まっている

そして、私は矢を離れた

矢はまっすぐと彼女に向かう。それを彼女は……本当に避けも防ぎもしなかった

「バカだろ、あいつ」

「流石に死んだな」

彼女を侮辱する輩が何人かいるが、私には理解出来ない。自らが一度言った言葉を貫くのがどれだけ難しいかを彼等は知らないのだからか？

「……せん」

「あ？ オオカミ何か言ったか？」

「か、片那さんは死んでません！」

オオカミは私達の中でも特別だ。我々の目標が竜殺しの英雄、または竜に関わる人物ならば……オオカミは竜殺しの英雄を補佐出来る存在になりたいのだ

そして、その彼が得意とする魔術は……敵の生死を確める魔術なのだ。その彼が無意味な事を言う筈がない

「ふっ……なかなか見上げたクラスメートだ。ご褒美に明日撫でてやろう」

「……はあ、やはり生きてましたか。オオカミの【検死】が外れる事なんてありませんからね」

「ああ、流石にアレは痛かったがな。だが……本物には遠く及ばない。もっと回転を上げる工夫を。あと、矢尻は先端から渦を巻くような溝を掘れ。そっちのが痛い」

「ま、まるで本物を喰らった事があるような言いぶりですね」

だが……その私の言葉は、彼女は肯定した

それは誰にも信じられない最悪の真実

何故なら盟主から聞いた彼女の通り名は、ある神を殺した事で付いたのだから

「さて、今の私はお腹にアザが出来てグロッキーな状態だ。逃げるなら追わないぞ。ただ、加減出来ない程度には怒ってるから立ち向かうのはオススメしない」

甘かった。私達、いや盟主もか。彼女の周囲が揺らめくを見ながら、そんな事を思った

「私は倒した神の武具を奪い、能力を奪い使用出来る。さて、今日は何を使おうか？ なんなら本物でも使ってやろうか？」

聞いた話によると彼女が倒した神は【勝利】【契約】【雷霆】【月】
【太陽】【英雄】【現在】【過去】【未来】

だが、私達はただの噂だと切り捨てた。真実とも知らずに

「……負けですね。すみませんが、今回は退かせていただきます」
「なっ？！ ドウーク、盟主の命はどうなる？！」

「今回は相手が悪過ぎます」

「お、俺はやるぜ！ 逃げるのはおくびよ」

彼の言葉は途中で遮られた。彼女が魔術をしようしたのだ

「なに、ただの気絶させただけだ。退くならさっさと行ってくれ。
私は月見酒を楽しみたいんだ」

「……分かりました」

〃 〃 〃 〃

片那 side

「ふう、ようやく静かになったな」

公園に来てからもう30分近く経っただろう

本当に毎日迷惑な事だ

そう思いながら、酒を口に運ぶ

「ああ、落ち着くな。やはり酒はいい。特に……月夜を肴に出来る日は特に、な」

酒を飲んだりしている時は、本当に幸せだ。何せ美味い、楽しい、怪我が治るで一石三鳥だからな

だが……流石にそろそろ戻るか、これ以上遅くなると刃魔が心配してしまう

【昼】私とアイツの出会い

今日、私は天使を見つけた

サラサラとした髪は私の手のひらを楽しませ、私を睨みつけるその眼はまるで黒曜石のようだ

なにより、その可愛らしいのはその顔と見た目だ

そう、今私の膝の上にいるのは……小さいのだ。体のサイズが！

「んんっ？！」

「何々？ 片那さんの膝最高です？ よし、もっと撫でてやる」

「ん、んんん！！」

ははは、手足を縛られた状態で暴れても力なんて入る訳なからう

「って、問題起こすなと言った次の日に問題を起こすな！」

「あぐッ？！」

不意打ちで後頭部にイスを投げられてイスからぶっ飛ぶ私

おい、普通の奴ならしんでるぞ？

「あ、ああ！ ちょっと、待っていてください。今ほどきますから！」

「何故邪魔をする刃魔、魔理亜？！」

「私は風紀委員だからな？ 目の前で両手足縛られ、口に布詰められてる者がいたら助けるに決まってるだろう？ 常識的に考えて」

「というか、犯罪だから」

そんな話がしてると、ようやく布が取れたのか、目に涙を浮かべた天使が私を睨んでいた

「いきなり」

「アレは私の愛情表現で」

「何するんだこの変態がー!!」

「うぐっ?!」

側頭部に謎の衝撃が走る

視線を上げると、さっきまで1m程離れた場所にいた天使がいつの間にか私の目の前にいた

まさか……その姿で跳なりび蹴りでもかましたというのか?!

「というか誰だお前は?!」

「わ、私か? 私は昨日転校してきた神ぎぞ」

「知り合いでもないのにこんなことするのかー!!」

「うぐっ……!!」

いきなり鳩尾みぞおち辺りに衝撃が走る

まさかと思い重たい頭を上げると、伸ばした足をゆっくりと下しているところだった

……今まで戦った奴等でもこれ程の奴がいただろうか?

「ああ、朝から最悪な気分だ。しかも2日続けてかよクソ」

「ま、待て。お前はいつたい……?」

「その変態風紀にでも聞いとけクソ女」

〃

〃

〃

〃

「如月刹那か」

「ああ、なんなら詳しく言ってやろうか？」

「頼む。アレが敵だと洒落にならん。可愛すぎて攻撃できない」

「……私も對外変わつてると思うが、君もなかなかだな」

「そんな事より奴のプロフィールを頼む」

そして私にとって驚くべき情報が教えられた

「見た目は完全に少女だが、中身と身体はちゃんとした男だ」

「シヨタつ子k t k r！」

「テンシヨン戻せ。で、驚くかもしれないが……彼は、いや、あの方は龍童家次期当主にして昴様の血を引き継いだ……お孫さんだよ」

一瞬の静寂

そして隣から聞こえる悲鳴にも近い驚きの声

「え、ほ、本当なんですか魔理亜さん！ つ、つまりそれって、そのあの」

「ああ、世界で最も影響力のある12歳だ」

「って何い?! あのジジイに孫がいただと?!」

それはあまりにも驚きの新事実だ

何せ、あのジジイは血縁者がいないせいでグループの中から次期当主を選ぼうとしていた

つまり、血縁者などいない筈なのだ

「片那、別に血縁者がいなかった訳じゃないよ？」

「ああ。昴様は御子息達が金に目がくらんだ上に努力も何もせずに関手を蹴落とそうとする阿呆ばかりだからこそ、他から選ばうとしていたんだ」

「それはつまり、如月の親も……そうなのでは？」
「それだけはない」

キツパリと断言された

その瞳には今の私の発言に殺意すら感じる程の力を感じる

「少年の、如月刹那の両親だけは別格だ。金に目を眩ませる事など無く、才能があるのに奢らず、そして人よりも勤勉で優しい方々だった」

過去形なのが……酷く気になった

それはつまり……如月の両親は

「死んだよ。もう、7年も前の事だ」

「……そうか」

「……あれ？」

「どうした刃魔？」

「あ、あの……亡くなった息子さんの話、私も聞いた事があるんですが確か名前は」

「……ほう、気付いたか」

何の話だろうか？

あのジジイの息子の名前に何かあるのだろうか？

「その、息子さんの名前と、お孫さんの名前」

「ああ、両者『刹那』という名前だよ」

「は？」

「疑問に思つかもしれないがそれは私も理由を知らなくてな。知りたかったら本人に聞いてくれ。もっとも」

—— 本人も知らないだろうがな

|| || || ||

昼休み、屋上で刃魔と一緒にサンドイッチを食べていたんだが…
やはり、先程の話が気になる

「刃魔」

「なんだ片那？」

「――」へアクセスしてくれ」

「……やっぱり調べたいの？」

「ああ、もしかしたら……アイツはとんでもない奴かもしれん」

あくまで勘だ

身体能力や生い立ちが気になるのではない

何故自らの事すら分らないのか、それを知りたい。もしそれが
ただの記憶喪失なら問題ない。だからこそ確める。敵か、味方か、
中立か、無関係か

「いいよ。じゃあ……意識を集中させて」

「ああ……」

私達がするのは最悪の覗き行為

それは全てを記してある場所への侵入行為

カチリッ

——繋がった

「行ってくる」

「ちゃんと、戻って来てね」

私は闇の中をひたすら進み続ける
その先にある「」にたどり着く為に

やがて、一枚の扉が見え始める

まあ、あくまでイメージにしか過ぎないが

私が近づくと扉は自動的に開いた

そして、「」へと侵入する

「ここはいつ来ても圧倒されるな」

目の前に広がるのは数えきれない程の本棚

【】、通称【図書館】の入り口部分だ

その本棚に収まっているのは生きとし生ける物全ての運命だ

「つと、圧倒されてる場合じゃないな。ええつと、私たちの世界は……あつた」

私は本棚に手をかざし、『検索』を呼び出す

『どなたを検索しますか？』

「検索名「如月刹那」」

タグは両親との死別、奇跡の生還、両親と同じ名前、現在生存……こんな所か

『検索を開始。……該当者1名、その人物は2015年9月日以降のデータがありませんが問題ありませんか？』

「……は？ それ以前のデータは無いのか？」

『この名は偽名である為、それ以前のデータは検索出来ません。本名を入力してください』

「クソツ……そのデータで良いから見せろ」

出てきた本は1ページしかない

おかしい。この薄さは異常だ。というか本じゃなくて紙じゃん。どれだけ情報無いんだよ

『如月刹那 本名：龍童 ■ ■

2015年9月5日14:34:07に両親と死別（当時5歳）。この時、精神的な要因により記憶喪失になる。その後、2015年9月7日04:17:05まで病院で療養。2015年9月7日04:17:06に脱走。2015年9月15日23:52:56まで公園等で生活。当時両親の借金が原因で追われていた模様。2015年9月15日23:52:57に遠野縁により孤児院へ引き取

られる。名を尋ねられ、覚えていた名を自らの名として使用。2016年6月18日12:05:42に里親に引き取られる。なお、里親は保険金目的であった事を記入する。その後、2019年12月8日19:12:59まで軟禁。2019年12月8日12:14:34に遠野魔理亜により救出される。2019年12月15日10:05:27に龍童昂の養子となる……以降のデータは存在しません。なんらかの原因で廃棄、または欠損した可能性があります」

書いてある事もなかなか凄かったが……それ以前にデータの欠損？ 【図書館】のデータが？

そんなのありえる筈がない。いや、ありえて良い筈がない

此処にデータが無いという事は、アイツの運命は……存在していない事になる

【昼】 自重しない主人公と容赦をしない準主人公

私は戻ってきてからある事を考えていた
そう、如月刹那の事だ

「くっ、昔誰かに大切な事を習った気がするんだが……」

そう、確かおじいちゃん辺りが……極稀に転生する者がいるらしい
が、転生するときに【運命の書】が壊れると聞いた事があるような
気がする

つまり、そういう事か？

「それ以外にも最高神級の神なら情報を破壊する事も出来るよ」

「でも、やる理由がないだろ？」

「いや、それなんだが、真面目に働いてる神って数える程しかない
くてな。毎日遊んでいる奴等もいるんだよ」

「まあそれは昔戦った3姉妹が秋葉原にいたから納得できる」

「で、問題は……なんらかの理由で一人の人間を消したりすると、
過去ごとゴッソリ消すことがあるんだよ。で、その時【運命の書】
も、な？」

つまり、神様が遊んでて死ぬはずじゃない奴等が死んだ（いや死ぬ
とは限らんが）ときに「大丈夫だ。問題ない」で過去を消していな
かった事にするのか。……最低だなおい

「でも、そんな事するのはオーディーンくらいしか思い付かない

な」

「なら、別に運命が壊れてる訳じゃないんだな。いやよかったよかった」

「いや、よくはないと思うが……って何処に行くんだ？」

「もちろん、初等部を覗きに！」

「だからそれは犯罪だと何度言えば分かるんだ！」

そのまま、私は屋上から飛び出す
最も早いルートだからだ

「我が名は【勝利】！ 魔を弾く黒き翼を此処に！」

〃

〃

〃

〃

刃魔 side

漆黒の翼を背中から生やし、初等部に向かって飛び去る片那を見て、
私は少し涙を流した

あのバカ、魔術を白昼堂々と使うな……！

「だ、大丈夫大丈夫。バレなきゃいい。バレな」
「今のなんだ？」

「きや……え？」

後ろを振り返ると弁当を食べに来たんだろうか？ 猫がプリントされたカバンを手に如月刹那が立っていた

「な、なあ？ 今、アイツ、と、飛んでたよな？」

しかもハッキリと見たらしい。言い訳を考えても納得しそうな物がない

「え、あ、その」

「まさか、いや、でもそれしか考えられんし」

「い、いやアレは魔法みたいに見えるが……見える……と、とにかく、魔法じゃない！」

く、苦しい。かなり苦しい。もう少しマトモな言い訳は出来ないものか

バレたかもしれないと蒼くなる私。しかし、目の前の男（だっけ？）は神妙に頷いた後

「ああ、分かってる。さっきのアレはなんかの機械なんだろ」

まったく予想もしなかった事を言ってきた

「いやはや驚いたぜ。まさか、サキが俺以外にああいうキテレツ作品を渡すとはな」

「え、あの？」

「まあバカな奴同士馬があっただろうな」

一人で勝手に納得している如月刹那

これは助かったと判断してもいいんだろうか？

「にしても、お前言動に気を付けた方がいいぞ？」

「え？」

「さっき魔法とか言ってただろ？　そういうのを現実にあるみたいに言う奴の事を厨二病って言うらしいぞ？　俺は気にしないけどさ、あんまり他の奴に言わない方がいいぞ？」

もしかして、だが。今私は心配をされたのか？

「入学して2日目で変人扱い嫌だろ？　だったらもつと普通の話しなよ」

「え、ま、魔理亜さんに貴方は1週間休んでいたそうですが、な、何故昨日来たと」

「ん？　ああ、俺も昨日登校したからな。あ、そうそう、1―Dは良い奴多いからあんまり痛い発言しなきゃ割と仲良くなれるぜ。あ

と……」

何故か右手を差し出してきた。……何をしているんだろうか？

「……えつと？」

「ん？ どうした？」

「こ、この手はいつたい何ですか？」

「握手以外に何かあるのか？」

な、何故に握手を求められたのだろうか？

「なんだ、してくれないのか？」

「え、あ、し、します」

とりあえず握手した

……本当に男性か？ 凄いぷにぷにしている。という指長いな。それに赤ちゃんの手みたいに温かい

「まあ、朝色々あったけどさ、アイツは嫌いでもアンタは普通だから仲良くしよう」

「本人に向かっている事でもない気がするが……まあ、私も貴方みたいなの（厄介そうなの）人とは仲良くしたい。よろしくお願いします」

……ん？ 今、一瞬握る力が強くなったような？

「仲良くなったからさ、一つばかり約束してくれないか？」

「や、約束？」

「……朝の事さ、誰にも言わないでくれよ。俺さ、魔理亜とサキ以外の前では基本的に良い奴演じてるんだよ。だから、朝の事は言わないでくれよ」

ミシッ……

あ、嫌な音が手から

「いた、いたたたた、や、やめ、いたたたた？！」

「約束、してくれる？」

「す、する、するから離しいたたた？！」

「うん、ありがとう。お前が良い奴で良かったよ」

……恐ろしい

何が恐ろしいって、笑顔で口封じが出来るのが恐ろしい

「じゃあな、神前刃魔。また会うのを楽しみにしてるよ」

コレが後に神前片那と如月刹那……両者が本気でケンカする原因になるとは、この時私はまったく想像していなかった

【昼】ケンカの原因は基本的に小さい事である（前書き）

学園パートは基本的に【昼】、バトルパートは【夜】にします
たまに【夕】がありますが、それはどっち付かずの時です

【昼】ケンカの原因は基本的に小さい事である

目の前に広がるのはこの世の中で最も清らかで最も愛らしく、そして最も素晴らしい光景だ

動く度に飛び散る汗、その汗を吸った体操服、身体に張り付き透けて見える下着

だが、何より素晴らしいのは……そのあどけない笑顔だろう

「ああ、可愛い。可愛すぎるぞ子供達……！」

そう言いながら、魔術で姿を隠しながら小学生達の写真を撮り続けている変な、……もとい女性は神前片那、信じたくはないがこの小説の主人公である

現在、初等部のグラウンドで 盗作をしている真最中である

盗撮は犯罪なので皆さん真似をしないようにしましゅう。いや、しねーよ、というツッコミは無しの方角でお願いします

「やはり子供撮影は癒されるな」

本人曰く、盗作は野鳥撮影と同じらしい。言い方が違つと趣味のよ
うに聞こえるが、結局は犯罪である

「さて、そろそろ昼休みも終るし教室に戻るか。ああ、本当に残念
だ」

何度も言うが、コレが主人公である

〃
〃
〃

放課後、刃魔と合流した後、暗くなるまで遊び回つた。といつても
7時半くらいまでだが
だが、その後真つ直ぐに帰ろうとした時、刃魔が話が話をするため
に公園に行きたいと言い出した。何の話だろうか？

「……何がいいたいか分かるな？」

「ああ、お姉ちゃん大好きだな」

「違う！ 私が言いたいのは魔術を白昼堂々使うなという事だ！」

「なんだそんな事か」

片那からすれば「何故利便性を無視して秘匿しなければならない」

で、ある

ちなみに他の魔術師が秘匿する理由は様々で「自らを特別な者と思いたい」という思いや「魔術は武器と同じ以上の力があるため表に出してはいけない」という危機感等が秘匿する理由になっている
刃魔としては「人前で使わなければ特に問題はない」という考えだが……片那は人前だろうがなんだろうが堂々と使用するのだ

「少しは見られた時の事を考えてくれ」

「気にするな。見られた所で特に問題などない」

「……はあ、毎回苦勞する身にもなってくれ。今日だって如月刹那にバレかけて大変だったんだぞ」

どうやら私が初等部に翔んだ後に如月に会ったのか。羨ましい……
あのうなじから肩のラインが色つぽいよな

「今なにか邪な事よこしまは考えなかったか？」

「気のせいだ。寧ろ健全な思考だ」

「……まあいい。ともかく、アレは色々な意味で普通の奴と違ったからよかったが、普通の奴ならアウトだったぞ！　うう、……まだ手が痛い」

「ど、どうしたケガでもしたのか？！」

手を押さえた刃魔を見て片那の纏う空気が変わった

刃魔は色々な意味で鈍いため気付いてはいないが、身体から此処に他の人がいたら間違いなく逃げ出すような殺気すら放っている

「ん？ ああ、如月刹那と握手した時少しな」

「そうか。ところで刃魔、今まで忘れていたが、私は昴のジジイに呼ばれていた。先に帰っててくれないか？」

「何故だ？ 私も一緒に行った方が」

「いや、それが「幽霊退治」らしくて」

「早めに帰って来てよ」

幽霊の一言で凄い速度で逃げ始める。この神様は昔から幽霊やお化けが苦手なのだ

刃魔が走り去ったのを確認した後、片那は学園に戻る。この時間帯はほとんどの者がもう帰っている筈だが……何故か会える気がしたのだ

「如月、……ふっ、私が着くまで念仏でも唱えているがいい！」

コレが、学園内で【迷惑戦争】と呼ばれるケンカの始まりだったりする

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5759v/>

神を滅ぼす終焉の剣

2012年1月8日20時46分発行